

## 常盤敏行・勝子さんご夫妻を

## 下稲子に訪ねる

先月、光陽の里設立時からの会員常盤敏行さんから「掛川から芝川町(現富士宮市)に引っ越して6年半が経ちます。掛川時代は皆様、そして宮城さんには大変お世話になり、この僻地で自給百姓しているのもそのおかげと感謝しています。現在、田1反5畝(布マルチと古代米)と畑1反を借り、自給しています。」という書き出しでご夫妻の近況を伝える県の情報誌が送られてきました。先に近況をお知らせくださいとお願いしてあったからです。素敵な内容の記事を見て「百聞一見にしかず」と藤本事務局長とご自宅をお訪ねしました。(伊藤記)

常盤さんの住む下稲子は新幹線新富士駅から車で30分、山に囲まれた過疎地だ。ご夫妻に迎えられて風通しの良い天井の高い部屋でお話を伺う。

2005年の12月まで5年間住んだ掛川から下稲子への移転は、



緑に囲まれた玄関に立つ常盤敏行、勝子夫妻。この玄関まで森の仲間が出てくるようだ

息子さんのいる大和市に近いということ、掛川の半分の時間で済む。それにもっと田舎に住みたいの思い、それから近く近くに温泉があるということも魅力だった。今は作物の市場出荷はやめているが、掛川時代に大勢の人と知り合い、教えてもらったことが基礎となつて、当地が必要とされる物々交換の自給百姓がやれている。

勝子さんにとって一番辛かったのは田んぼの草取り。1列の往復でもうお手上げ。それくらい辛い。それが布マルチで救われた。津野先生には感謝している。

自分の手で作った米はうまい。冷や飯で食べるとよくわかる。うるちが1反、古代米ともち米で5畝、この5畝は手植えで、草取りも手でやっている。自給だけの生活では、1反で十分。多すぎるくらい。しょつ



山の風、富士川の瀬音の中で作物の生育振りを語り合う常盤さんと藤本さん

ちゅう行われる会合に1升炊いて持つて行っている。そこの話、「我が家で炊いて持つていくオニギリが一番美味しいと小学校2年生の女の子が言うのです。子供は正直だからこの評価は本物。嬉しい。」どこでも自分の作ったコメが一番というが、やはり中山間地のコメがうまいのかもしれない。(笑い)

稲子地区で定住促進事業として空き家に都会の人に来てもらう活動を展開している。今までにこの地区で5家族、毎年1家族が移住してきている勘定だ。私たち以外は20代から30代の若い人たちだ。この周辺の街から来ている。彼等と2ヶ月に1回ほどのペースで家族ぐるみ一品持ちより親睦会がある。こちらに移り住む人は必ずしも農業をやるとは限らない。職業はいろいろだ。田舎暮らしといっても住



常盤さんの次に古い住民の五日市さん。電気を使わない生活を通している。

み方も定住から仕事の時だけ利用する人まで多様だ。地元の人も含め、それぞれがグループを作って月1回程度の家族ぐるみ、一品持ちよりの持ち回り飲み会等を盛んにやっている。みな個性的な生活ぶりで、人生を謳歌している。今年はガラス工芸をやっている方が移り住む。来年4月には息子さんも来られる。今は田舎暮らしの生活スタイルも随分普及してきた。若い人もわれわれのような定年後田舎でゆつくり暮らす人が増えた。このあたりは都会との交通の便がよい。横浜、東京から東名で1時間、富士インターで降りて、2,30分の距離だ。神奈川の家まで1時間で行ける。病院の条件も都会とさほど変わらない。私は、これからは働く時間を抑え、働く範囲を狭めて自給自足の生活を目指す。そしてこれらの人や、地元の人との親睦をもっと深めたい。のびのびでなく「のみのみ」と暮らしたい。

地域の人々と豊かな付き合いの喜びを語る常盤さん

